修禪寺物語

岡本綺堂

青空文庫

（伊豆の修禪寺に頼家の面といふあり。作人も知れず。由來もしれず。木彫の假面にて、年を經たるまゝ面目分明ならねど、所謂古色蒼然たるもの、觀來つて一種の詩趣をおぼゆ。當時を追懐してこの稿成る。）

登場人物

面作師　夜叉王
夜叉王の娘　かつら
同　かへで
かへでの婿　春彦
源左金吾頼家
下田五郎景安
　金窪兵衛尉行親
修禪寺の僧
行親の家來など

（一）

伊豆の國狩野の庄、修禪寺村（今の修善寺）桂川のほとり、夜叉王の住家。藁葺の古びたる二重家體。破れたる壁に舞樂の面などをかけ、正面に紺暖簾の出入口あり。下手に爐を切りて、素燒の土瓶などかけたり。庭の入口は竹にて編みたる門、外には柳の大樹。そのうしろは畑を隔てゝ、塔の峯つゞきの山または丘などみゆ。元久元年七月十八日。

（二重の上手につゞける一間の家體は細工場にて、三方に古りたる蒲簾をおろせり。庭さきには秋草の花咲きたる垣に沿うて荒むしろを敷き、姉娘桂甘歳。妹娘楓、十八歳。相對して紙砧を擣つてゐる。）

かつら　（軈て砧の手をやめる）一※餘りも擣ちつゞけたので、肩も腕も痺るゝやうな。もうよいほどにして止めうでないか。

かへで　とは云ふものゝ、きのふまでは盆休みであつたほどに、けふからは精出して働かうではござんせぬか。

かつら　働きたくばお前ひとりで働くがよい。父樣にも春彦どのにも褒められようぞ。わたしは忌ぢや、忌になつた。（投げ出すやうに砧を捨つ）

かへで　貧の手業に姉妹が、年ごろ擣ちなれた紙砧を、兎かくに飽きた、忌になつたと、むかしに變るお前がこの頃の素振は、どうしたことでござるか喃。

かつら　（あざ笑ふ）いや、昔とは變らぬ。ちつとも變らぬ。わたしは昔からこのやうな事を好きではなかつた。父さまが鎌倉においでなされたら、わたし等も斯うはあるまいものを、名聞を好まれぬ職人氣質とて、この伊豆の山家に隱れ栖、親につれて子供までも鄙にそだち、詮事無しに今の身の上ぢや。さりとてこのまゝに朽ち果てようとは夢にも思はぬ。近いためしは今わたし等が擣つてゐる修禪寺紙、はじめは賤しい人の手につくられても、色好紙とよばれて世に出づれば、高貴のお方の手にも觸るゝ。女子とてもその通りぢや。たとひ賤しう育つても、色好紙の色よくば、關白大臣將軍家のおそばへも、召出されぬとは限るまいに、賤の女がなりはひの紙砧、いつまで擣ちおぼえたとて何とならうぞ。忌になつたと云うたが無理か。

かへで　それはおまへが口癖に云ふことぢやが、人には人それ〳〵の分があるもの。將軍家のお側近う召さるゝなどと、夢のやうな事をたのみにして、心ばかり高う打ちあがり、末はなんとならうやら、わたしは案じられてなりませぬ。

かつら　お前とわたしとは心が違ふ。妹のおまへは今年十八で、春彦といふ男を持つた。それに引きかへて姉のわたしは、二十歳といふ今日の今まで、夫もさだめずに過したは、あたら一生を草の家に、住み果つまいと思へばこそぢや。職人風情の妻となつて、滿足して暮すお

まへ等に、わたしの心はわかるまい喃。（空嘯く）

（楓の婿春彦、廿餘歳、奥より出づ。）

春彦　桂どの。職人風情と左も卑しい者のやうに云はれたが、職人あまたあるなかにも、面作師といへば、世に恥しからぬ職であらうぞ。あらためて申すに及ばねど、わが日本開闢以來、はじめて舞樂のおもてを刻まれたは、勿體なくも聖徳太子、つゞいて藤原淡海公、弘法大師、倉部の春日、この人々より傳へて今に至る、由緒正しき職人とは知られぬか。

かつら　それは職が尊いのでない。聖徳太子や淡海公といふ、その人々が尊いのぢや。彼の人々も生業に、面作りはなされまいが……。

春彦　生業にしては卑しいか。さりとは異なことを聞くものぢやの。この春彦が明日にもあれ、稀代の面をつくり出して、天下一の名を取っても、お身は職人風情と侮るか。

かつら　云んでもないこと、天下一でも職人は職人ぢや、殿上人や弓取とは一つになるまい。

春彦　殿上人や弓取がそれほどに尊いか。職人がそれほどに卑しいか。

かつら　はて、くどい。知れたことぢやに……。

（桂は顔をそむけて取合はず。春彦、むつとして詰めよるを、楓はあわてゝ押隔てる。）

かへで　あゝ、これ、一旦かうと云ひ出したら、飽までも云ひ募るが姉さまの氣質、逆らうては惡い。いさかひはもう止してくだされ。

春彦　その氣質を知ればこそ、日ごろ堪忍してゐれど、あまりと云へば詞が過ぐる。女房の縁につながりて、姉と立つれば附け上り、やゝもすれば我を輕しむる面憎さ。仕儀によつては姉とは云はさぬ。

かつら　おゝ、姉と云はれずとも大事ござらぬ。職人風情を妹婿に持つたとて、姉の見得にも手柄にもなるまい。

春彦　まだ云ふか。

（春彦は又つめ寄るを、楓は心配して制す。この時、細工場の簾のうちにて、父の聲。）

夜叉王　えゝ、騒がしい。鎭まらぬか。

（これを聽きて春彦は控へる。楓は起つて蒲簾をまけば、伊豆の夜叉王、五十餘歳、烏帽子、筒袖、小袴にて、鑿と槌とを持ち、木彫の假面を打つてゐる。膝のあたりには木の屑など取散したり。）

春彦　由なきことを云ひ募つて、細工の御さまたげをも省みぬ不調法、なにとぞ御料簡くださりませ。

かへで　これもわたしが姉様に、意見がましいことなど云うたが基。姉様も春彦どのも必ず叱つて下さりまするな。

夜叉王　おゝ、なんで叱らう、叱りはせぬ。姉妹の喧嘩はまゝある事ぢや。珍らしうもあるま

い。時に今日ももう暮るゝぞ。秋のゆふ風が身にしみるわ。そち達は奥へ行つて夕飯の支度、燈火（あかり）の用意でもせい。

二人　あい。

（桂と楓は起つて奥に入る。）

夜叉王　なう、春彦。妹とは違うて氣がさの姉ぢや。同じ屋根の下に起き臥しすれば、一年三百六十日、面白からぬ日も多からうが、何事もわしに免じて料簡せい。あれを産んだ母親は、そのむかし、都の公家衆（くげしゆ）に奉公したもの、縁あつてこの夜叉王と女夫（めをと）になり、あづまへ流れ下つたが、育ちが育ちとて氣位高く、職人風情に連れ添うて、一生むなしく朽ち果るを悔みながらに世を終つた。その腹を分けた姉妹、おなじ胤とはいひながら、姉は母の血をうけて公家氣質（かたぎ）、妹は父の血をひいて職人氣質、子の心がちがへば親の愛も違うて、母は姉贔屓（びいき）、父は妹贔屓。思ひ〳〵に子どもの贔屓爭ひから、埒もない女夫喧嘩などしたこともあつたよ。はゝゝゝゝゝ。

春彦　さう承はれば桂どのが、日ごろ職人をいやしみ嫌ひ、世にきこえたる殿上人か弓取ならでは、夫に持たぬと誇らるゝも、母御の血筋をつたへし爲、血は爭はれぬものでござりまするな。

夜叉王　ぢやによつて、あれが何を云はうとも、滅多に腹は立てまいぞ。人を人とも思はず、氣位高う生れたは、母の子なれば是非がないのぢや。

（暮の鐘きこゆ。奥より楓は燈臺を持ちて出づ。）

春彦　おゝ、取紛れて忘れてゐた。これから大仁の町まで行つて、このあひだ誂へて置いた鑿と小刀をうけ取つて來ねばなるまいか。

かへで　けふはもう暮れました。いつそ明日にしなされては……。

春彦　いや、いや、職人には大事の道具ぢや。一刻も早う取寄せて置かうぞ。

夜叉王　おゝ、職人はその心掛けがなうてはならぬ。更けぬ間に、ゆけ、行け。

春彦　夜とは申せど通ひなれた路、一※ほどに戻つて來まする。

（春彦は出てゆく。楓は門にたちて見送る。修禪寺の僧一人、燈籠を持ちて先に立ち、つゞいて源の頼家卿、廿三歳。あとより下田五郎景安、十七八歳、頼家の太刀をさゝげて出づ。）

僧　これ、これ、將軍家の御しのびぢや。粗相があつてはなりませぬぞ。

（楓ははツと平伏す。頼家主從すゝみ入れば、夜叉王も出で迎へる。）

夜叉王　思ひもよらぬお成とて、なんの設けもござりませぬが、先づあれへお通りくださりませ。

（頼家は縁に腰を掛ける。）

夜叉王　して、御用の趣は。

頼家　問はずとも大方は察して居らう。わが面體を後のかたみに殘さんと、さきに其方を召出

し、頼家に似せたる面を作れと、繪姿までも遣はして置いたるに、日を經るも出來せず。幾たびか延引を申立てゝ、今まで打過ぎしは何たることぢや。

五郎　多寡が面一つの細工、いかに丹精を凝らすとも、百日とは費すまい。お細工仰せつけられしは當春の初め、其後已に半年をも過ぎたるに、いまだ獻上いたさぬとは餘りの懈怠、もはや猶豫は相成らぬと、上様の御機嫌さん／〃＼ぢやぞ。

頼家　予は生れついての性急ぢや。いつまで待てど暮せど埒あかず、あまりに歯痒う覺ゆるまゝ、この上は使など遣はすこと無用と、予が直々に催促にまゐつた。おのれ何故に細工を怠り居るか。仔細をいへ、仔細を申せ。

夜叉王　御立腹おそれ入りましてござりまする。勿體なくも征夷大將軍、源氏の棟梁のお姿を刻めとあるは、職のほまれ、身の面目、いかでか等閑に存じませうや。御用うけたまはりて已に半年、未熟ながらも腕限り根かぎりに、夜晝となく打ちましても、意にかなふほどのもの一つも無く、更に打ち替へ作り替へて、心ならずも延引に延引をかさねましたる次第、なにとぞお察しくださりませ。

頼家　えゝ、催促の都度におなじことを……。その申譯は聞き飽いたぞ。

五郎　この上は唯だ延引とのみでは相濟むまい。いつの頃までにはかならず出來するか、あらかじめ期日をさだめてお詫を申せ。

夜叉王　その期日は申上げられませぬ。左に鑿をもち、右に槌を持てば、面はたやすく成るも

のと思召すか。家をつくり、塔を組む、番匠なんどとは事變りて、これは生なき粗木を削り、男、女、天人、夜叉、羅刹、ありとあらゆる善惡邪正のたましひを打ち込む面作師。五體にみなぎる精力が、兩の腕におのづから湊まる時、わがたましひは流るゝ如く彼に通ひて、はじめて面も作られまする。但しその時は半月の後か、一月の後か、あるひは一年二年の後か。われながら確とはわかりませぬ。

僧　これ、これ、夜叉王どの。上樣は御自身も仰せらるゝごとく、至つて御性急でおはします。三島の社の放し鰻を見るやうに、ぬらりくらりと取止めのないことばかり申上げてゐたら、御癇癖がいよ〳〵募らうほどに、こなたも職人冥利、いつの頃までと日を限つて、しかと御返事を申すがよからうぞ。

夜叉王　ぢやと云うて、出來ぬものはなう。

僧　なんの、こなたの腕で出來ぬことがあらう。面作師も多くあるなかで、伊豆の夜叉王といへば、京鎌倉までも聞えた者ぢやに……。

夜叉王　さあ、それゆゑに出來ぬと云ふのぢや。わしも伊豆の夜叉王と云へば、人にも少しは知られたもの。たとひお咎め受けうとも、己が心に染まぬ細工を、世に殘すのはいかにも無念ぢや。

頼家　なに、無念ぢやと……。さらばいかなる祟りを受けうとも、早急には出來ぬといふか。

夜叉王　恐れながら早急には……。

頼家　むゝ、おのれ覺悟せい。

（癇癖募りし頼家は、五郎のさゝげたる太刀を引つ取つて、あはや抜かんとす。奥より桂、走り出づ。）

かつら　まあ、まあ、お待ちくださりませ。

頼家　えゝ、退け、のけ。

かつら　先づお鎭まりくださりませ。面は唯今獻上いたしまする。なう、父様。

（夜叉王は默して答へず。）

五郎　なに、面は已に出來してをるか。

頼家　えゝ、おのれ。前後不揃ひのことを申立てゝ、予をあざむかうでな。

かつら　いえ、いえ、嘘いつはりではござりませぬ。面はたしかに出來して居りまする。これ、父様。もうこの上は是非がござんすまい。

かへで　ほんにさうぢや。ゆうべ漸く出來したと云ふあの面を、いつそ獻上なされては……。

僧　それがよい、それがよい。こなたも凡夫ぢや。名も惜からうが、命も惜からう。出來した面があるならば、早う上様にさしあげて、お慈悲をねがふが上分別ぢやぞ。

夜叉王　命が惜いか、名が惜いか、こなた衆の知つたことではない。默つておゐやれ。

僧　さりとて、これが見てゐられうか。さあ、娘御。その面を持つて來て、兎もかくも御覽に入れたがよいぞ。早う、早う。

かへで　あい、あい。

（かへでは細工場へ走り入りて、木彫の假面(めん)を入れたる箱を持ち出づ。桂はうけ取りて頼家の前にさゝぐ。頼家は無言にて桂の顔をうちまもり、心少しく解けたる體なり。）

かつら　いつはりならぬ證據、これ御覽くださりませ。

（頼家は假面を取りて打ちながめ、思はず感嘆の聲をあげる。）

頼家　おゝ、見事ぢや。よう打つたぞ。

五郎　上様おん顔に生寫しぢや。

頼家　むゝ。（飽かず打戍る）

僧　さればこそ云はぬことか。それほどの物が出來してゐながら、兎かう澁つて居られたは、夜叉王どのも氣の知れぬ男ぢや。はゝゝゝゝ。

夜叉王　（形をあらためる）何分にもわが心にかなはぬ細工、人には見せじと存じましたが、かう相成つては致方もござりませぬ。方々にはその面(おもて)をなんと御覽なされまする。

頼家　さすがは夜叉王、あつぱれの者ぢや。頼家も滿足したぞ。

夜叉王　あつぱれとの御賞美は憚(はゞか)りながらおめがね違ひ、それは夜叉王が一生の不出來。よう御覽(ごらう)じませ。面は死んでをりまする。

五郎　面が死んでをるとは……。

夜叉王　年ごろあまた打つたる面は、生けるがごとしと人も云ひ、われも許して居りましたが、不思議やこのたびの面に限つて、幾たび打直しても生きたる色なく、たましひもなき死人の相……。それは世にある人の面ではござりませぬ。死人の面でござりまする。

五郎　そちは左様に申しても、われらの眼には矢はり生きたる人の面……。死人の相とは相見えぬがなう。

夜叉王　いや、いや、どう見直しても生ある人ではござりませぬ。しかも眼に恨を宿し、何者をか呪ふがごとき、怨霊怪異なんどのたぐひ……。

僧　あ、これ、これ、そのやうな不吉のことは申さぬものぢや。御意にかなへばそれで重畳、ありがたくお禮を申されい。

頼家　むゝ、兎にも角にもこの面は頼家の意にかなうた。持歸るぞ。

夜叉王　強て御所望とござりますれば……。

頼家　おゝ、所望ぢや。それ。

（頼家は頤にて示せば、かつら心得て假面を箱に納め、すこしく媚を含みて頼家にさゝぐ。頼家は更にその顔をぢつと視る。）

頼家　いや、猶かさねて主人に所望がある。この娘を予が手許に召仕ひたう存ずるが、奉公さする心はないか。

夜叉王　ありがたい御意にござりまするが、これは本人の心まかせ、親の口から御返事は申上

げられませぬ。

（桂は臆せず、すゝみ出づ。）

かつら　父様。どうぞわたしに御奉公を……。

頼家　うい奴ぢや。奉公をのぞむと申すか。

かつら　はい。

頼家　さらばこれよりその面をさゝげて、頼家の供してまゐれ。

かつら　かしこまりました。

（頼家は起つ。五郎も起つ。桂もつゞいて起つ。楓は姉の袂をひかへて、心許（こゝろもと）なげに囁く。）

かへで　姉さま。おまへは御奉公に……。

かつら　おまへは先程、夢のやうな望みと笑うたが、夢のやうな望みが今叶うた。

（かつらは誇りがに見かへりて、庭に降り立つ。）

僧　やれ、やれ、これで愚僧も先づ安堵いたした。夜叉王どの、あす又逢ひませうぞ。

（頼家は行きかゝりて物につまづく。桂は走り寄りてその手を取る。）

頼家　おゝ、いつの間にか暗うなつた。

（僧はすゝみ出でて、桂に燈籠を渡す。桂は假面の箱を僧にわたし、我は片手に燈籠を持ち、片手に頼家をひきて出づ。夜叉王はぢつと思案の體なり。）

かへで　父さま、お見送りを……。

（夜叉王は初めて心づきたる如く、娘と共に門口に送り出づ。）

五郎　そちへの御褒美は、あらためて沙汰するぞ。

（頼家等は相前後して出でゆく。夜叉王は起ち上りて、しばらく默然としてゐたりしが、やがてつか〳〵と縁にあがり、細工場より槌を持ち來りて、壁にかけたる種々の假面を取下し、あはや打碎かんとす。楓はおどろきて取縋る。）

かへで　あゝ、これ、なんとなさる。おまへは物に狂はれたか。

夜叉王　せつぱ詰りて是非におよばず、拙き細工を獻上したは、悔んでも返らぬわが不運。あのやうな面が將軍家のおん手に渡りて、これぞ伊豆の住人夜叉王が作と寶物帳にも記されて、百千年の後までも笑ひをのこさば、一生の名折れ、末代の恥辱、所詮夜叉王の名は廢つた。職人もけふ限り、再び槌は持つまいぞ。

かへで　さりとは短氣でござりませう。いかなる名人上手でも細工の出來不出來は時の運。一生のうちに一度でも天晴れ名作が出來ようならば、それが即ち名人ではござりませぬか。

夜叉王　むゝ。

かへで　拙い細工を世に出したをそれほど無念と思召さば、これからいよ〳〵精出して、世をも人をもおどろかすほどの立派な面を作り出し、恥を雪いでくださりませ。

（かへでは縋りて泣く。夜叉王は答へず、思案の眼を瞑ぢてゐる。日暮れて笛の聲

遠くきこゆ。）

（二）

おなじく桂川のほとり、虎溪橋の袂。川邊には柳幾本たちて、芒と蘆とみだれ生ひたり。橋を隔てゝ修禪寺の山門みゆ。同じ日の宵。

（下田五郎は頼家の太刀を持ち、僧は假面の箱をかゝへて出づ。）

五郎　上様は桂どのと、川邊づたひにそゞろ歩き遊ばされ、お供の我々は一足先へまゐれとの御意であつたが、修禪寺の御座所ももはや眼のまへぢや。この橋の袂にたゝずみて、お歸りを暫時相待たうか。

僧　いや、いや、それは宜しうござるまい。桂殿といふ嫺女をお見出しあつて、浮れあるきに餘念もおはさぬところへ、我々のごとき邪魔外道が附き纏うては、却つて御機嫌を損ずるでござらうぞ。

五郎　なにさまなう。

（とは云ひながら、五郎は猶不安の體にてたゝずむ。）

僧　殊に愚僧はお風呂の役、早う戻つて支度をせねばなるまい。

五郎　お風呂とて自づと沸いて出づる湯ぢや。支度を急ぐこともあるまいに……。先づお待ち

やれ。

僧　はて、お身にも似合はぬ不粋をいふぞ。若き男女（をとこをうな）がむつまじう語らうてゐるところに、法師や武士は禁物ぢやよ。はゝゝゝゝ。さあ、ござれ、ござれ。

（無理に袖をひく。五郎は心ならずも曳かるゝまゝに、打連れて橋を渡りゆく。月出づ。桂は燈籠を持ち、頼家の手をひきて出づ。）

頼家　おゝ、月が出た。河原づたひに夜ゆけば、芒にまじる蘆の根に、水の聲、蟲の聲、山家（やまが）の秋はまた一としほの風情ぢやなう。

かつら　馴れては左程にもおぼえませぬが、鎌倉山の星月夜とは事變りて、伊豆の山家の秋の夜は、さぞお寂しうござりませう。

（頼家はありあふ石に腰打ちかけ、桂は燈籠を持ちたるまゝ、橋の欄に凭（よ）りて立つ。月明かにして蟲の聲きこゆ。）

頼家　鎌倉は天下の覇府、大小名の武家小路、甍（いらか）をならべて綺羅を競へど、それはうはべの榮えにて、うらはおそろしき罪の巷、惡魔の巣ぞ。人間の住むべきところで無い。鎌倉などへは夢も通はぬ。（月を仰ぎて云ふ）

かつら　鎌倉山に時めいておはしなば、日本一の將軍家、山家そだちの我々は下司（げす）にもお使ひなされまいに、御果報拙いがわたくしの果報よ。忘れもせぬこの三月、窟詣（いはや）での下向路（げかうみち）、桂谷の川上で、はじめて御目見得をいたしました。

頼家　おゝ、その時そちの名を問へば、川の名とおなじ桂と云うたな。

かつら　まだそればかりではござりませぬ。この窟のみなかみには、二本の桂の立木ありて、その根よりおのづから清水を噴き、末は修禪寺にながれて入れば、川の名を桂とよび、またその樹を女夫の桂と昔よりよび傳へてをりまするとお答へ申上げましたれば、おまへ様はなんと仰せられました。

頼家　非情の木にも女夫はある。人にも女夫はありさうな……と、つい戯れに申したなう。

かつら　お戯れかは存じませぬが、そのお詞が冥加にあまりて、この願かならず叶ふやうと、百日のあひだ人にも知らさず、窟へ日參いたせしに、女夫の桂のしるしありて、ゆくへも知れぬ川水も、嬉しき逢瀬にながれ合ひ、今月今宵おん側近う、召出されたる身の冥加……。

頼家　武運つたなき頼家の身近うまゐるがそれほどに嬉しいか。そちも大方は存じて居らう。予には比企の判官能員の娘若狭といへる側女ありしが、能員ほろびし其砌に、不憫や若狭も世を去つた。今より後はそちが二代の側女、名もそのまゝに若狭と云へ。

かつら　あの、わたくしが若狭の局と……。えゝ、ありがたうござりまする。

頼家　あたゝかき湯の湧くところ、温かき人の情も湧く。戀をうしなひし頼家は、こゝに新しき戀を得て、心の痛みもやうやく癒えた。今はもろ〳〵の煩惱を斷つて、安らけくこの地に生涯を送りたいものぢや。さりながら、月には雲の障りあり、その望みも果敢なく破れて、予に萬一のことあらば、そちの父に打たせたる彼のおもてを形見と思へ。叔父の蒲殿は罪無

うして、この修禪寺の土となられた。わが運命も遲かれ、おなじ路を辿らうも知れぬぞ。

（月かくれて暗し。籠手、臑當、腹巻したる軍兵二人、上下よりうかゞひ出でゝ、芒むらに潜む。蟲の聲俄にやむ。）

かつら　あたりにすだく蟲の聲、吹き消すやうに止みましたは……。

頼家　人やまゐりし。心をつけよ。

（金窪兵衞尉行親、三十餘歳。烏帽子、直垂、籠手、臑當にて出づ。）

行親　上、これに御座遊ばされましたか。

頼家　誰ぢや。

（柱は燈籠をかざす。頼家透しみる。）

行親　金窪行親でござりまする。

頼家　おゝ、兵衞か。鎌倉表より何としてまゐつた。

行親　北條殿のおん使に……。

頼家　なに、北條殿の使……。扨はこの頼家を討たうが爲な。

行親　これは存じも寄らぬこと。御機嫌伺ひとして行親參上、ほかに仔細もござりませぬ。

頼家　云ふな、兵衞。物の具に身をかためて夜中の參入は、察するところ、北條の密意をうけて予を不意撃にする巧みであらうが……。

行親　天下やうやく定まりしとは申せども、平家の殘黨ほろび殲さず。且は函根より西の山路に、盜賊ども徘徊する由きこえましたれば、路次の用心として斯様にいかめしう扮裝ち申した。上に對したてまつりて、不意擊の狼藉なんど、いかで、いかで……。

頼家　たとひ如何やうに陳ずるとも、憎き北條の使なんどに對面無用ぢや。使の口上聞くにおよばぬ。歸れ、かへれ。

（行親は騷がず。しづかに柱をみかへる。）

行親　これにある女性は……。

頼家　予が召仕ひの女子ぢやよ。

行親　おん謹みの身を以て、素性も得知れぬ賤しの女子どもを、おん側近う召されしは……。

（柱は堪へず、すゝみ出づ。）

かつら　兵衛どのとやら、お身は卜者か人相見か。初見參のわらはに對して、素性賤しき女子などと、迂濶に物を申されな。妾は都のうまれ、母は殿上人にも仕へし者ぞ。まして今は將軍家のおそばに召されて、若狹の局とも名乘る身に、一應の會釋もせで無禮の雜言は、鎌倉武士といふにも似ぬ、さりとは作法をわきまへぬ者なう。

（冷笑はれて行親は眉をひそめる。）

行親　なに。若狹の局……。して、それは誰に許された。

頼家　おゝ、予が許した。

行親　北條どのにも謀らせたまはず……。

頼家　北條がなんぢや。おのれ等は二口目には北條といふ。北條がそれほどに尊いか。時政も義時も予の家來ぢやぞ。

行親　さりとて、尼御臺もおはしますに……。

頼家　えゝ、くどい奴。おのれ等の云ふこと、聽くべき耳は持たぬぞ。退れ、すされ。

行親　さほどにおむづかり遊ばされては、行親申上ぐべきやうもござりませぬ。仰せに任せて今宵はこのまゝ退散、委細は明朝あらためて見參の上……。

頼家　いや、重ねて來ること相成らぬぞ。若狹、まゐれ。

（頼家は起ち上りて桂の手を取り、打連れて橋を渡り去る。行親はあとを見送る。芒のあひだに潜みし軍兵出づ。）

兵一　先刻より忍んで相待ち申したに、なんの合圖もござりませねば……。

兵二　手を下すべき機もなく、空しく時を移し申した。

行親　北條殿の密旨を蒙り、近寄つて討ちたてまつらんと今宵ひそかに伺候したるが、流石は上様、早くもそれと覺られて、われに油斷を見せたまはねば、無念ながらも仕損じた。この上は修禪寺の御座所へ寄せかけ、多人數一度にこみ入つて本意を遂げうぞ。上様は早業の達人、近習の者共にも手だれあり。小勢の敵と侮りて不覺を取るな。場所は狹し、夜いくさぢや。うろたへて同士撃すな。

兵　はつ。

行親　一人はこれより川下（かはしも）へ走せ向うて、村の出口に控へたる者どもに、即刻かゝれと下知を傳へい。

兵一　心得申した。

（一人は下手に走り去る。行親は一人を具して上手に入る。木かげより春彦、うかゞひ出づ。）

春彦　大仁の町から戻る路々に、物の具したる兵者（つはもの）が、こゝに五人かしこに十人屯（たむろ）して、出入りのものを一々詮議するは、合點がゆかぬと思うたが、さては鎌倉の下知によつて、上様を失ひたてまつる結構な。さりとは大事ぢや。

（遠近にて寢鳥のおどろき起つ聲。下田五郎は橋を渡りて出づ。）

五郎　常はさびしき山里の、今宵は何とやらん物さわがしく、事ありげにも覺ゆるぞ。念のために川の上下（かみしも）を一わたり見廻らうか。

春彦　五郎どのではおはさぬか。

五郎　おゝ、春彦か。

（春彦は近寄（ちかづ）きてさゝやく。）

五郎　や、なんと云ふ。金窪の參入は……。上様を……。しかと左様か。むゝ。

（五郎はあわたゞしく引返しゆかんとする時、橋の上より軍兵一人長巻をたづさへ

て出で、無言にて撃つてかゝる。五郎は抜きあはせて、忽ち斬つて捨つ。軍兵數人、上下より走り出で、五郎を押つ取りまく。）

五郎　やあ、春彦。こゝはそれがしが受け取つた。そちは御座所へ走せ參じて、この趣を注進せい。

春彦　はつ。

（春彦は橋をわたりて走り去る。五郎は左右に敵を引き受けて奮闘す。）

（三）

もとの夜叉王の住家。夜叉王は門にたちて望む。修禪寺にて早鐘を撞く音きこゆ。

（向ふより楓は走り出づ。）

かへで　父様。夜討ぢや。

夜叉王　おゝ、むすめ。見て戻つたか。

かへで　敵は誰やらわからぬが、人數はおよそ二三百人、修禪寺の御座所へ夜討をかけましたぞ。

夜叉王　俄にきこゆる人馬の物音は、何事かと思うたに、修禪寺へ夜討とは……。平家の殘黨か、鎌倉の討手か。こりや容易ならぬ大變ぢやなう。

かへで　生憎に春彦どのはありあはさず、なんとしたことでござりませうな。

夜叉王　我々がうろ〳〵立騒いだとてなんの役にも立つまい。たゞその成行を觀てゐるばかりぢや。まさかの時には父子が手をひいて立退くまでのこと。平家が勝たうが、源氏が勝たうが、北條が勝たうが、われ〳〵にかゝり合ひのないことぢや。

かへで　それぢやと云うて不意のいくさに、姉様はなんとなされうか。もし逃げ惑うて過失(あやまち)でも……。

夜叉王　いや、それも時の運ぢや、是非もない。姉にはまた姉の覺悟があらうよ。

（寺鐘と陣鐘とまじりてきこゆ。楓は起ちつ居つ、幾たびか門に出でゝ心痛の體。向ふより春彦走り出づ。）

かへで　おゝ、春彦どの。待ちかねました。

春彦　寄手(よせて)は鎌倉の北條方、しかも夜討の相談を、測らず木かげで立聽きして、其由を御注進申上げうと、修禪寺までは駈け付けたが、前後の門はみな圍まれ、翼なければ入ることかなはず、殘念ながらおめ〳〵戻つた。

かへで　では、姉様の安否も知れませぬか。

春彦　姉はさて措いて、上様の御安否さへもまだ判らぬ。小勢ながらも近習の衆が、火花をちらして追つ返しつ、今が合戰最中ぢや。

夜叉王　なにを云ふにも多勢に無勢、御所方とても鬼神ではあるまいに、勝負は大方知れてあ

る。とても逃れぬ御運の末ぢや。蒲殿といひ、上様と云ひ、いかなる因縁かこの修禪寺には、土の底まで源氏の血が沁みるなう。

（寺鐘烈しくきこゆ。春彦夫婦は再び表をうかゞひ見る。）

かへで　おゝ、おびたゞしい人の足音……。鎬（しのぎ）を削る太刀の音……。

春彦　こゝへも次第に近（ちかづ）いてくるわ。

（桂は頼家の假面を持ちて顔には髪をふりかけ、直垂を着て長巻を持ち、手負の體にて走り出で、門口に來りて倒る。）

春彦　や、誰やら表に……。

（夫婦は走り寄りて扶け起し、庭さきに伴ひ入るれば、桂は又倒れる。）

春彦　これ、傷は淺うござりまするぞ。心を確に持たせられい。

かつら　（息もたゆげに）おゝ妹……。春彦どの……。父様はどこにぢや。

夜叉王　や、なんと……。

（夜叉王は怪みて立ちよる。桂は顔をあげる。みな〳〵驚く。）

春彦　や、侍衆とおもひの外……。

夜叉王　おゝ、娘か。

かへで　姉さまか。

春彦　して、この體は……。

かつら　上様お風呂を召さるゝ折から、鎌倉勢が不意の夜討……。味方は小人數、必死にたゝかふ。女でこそあれこの桂も、御奉公はじめの御奉公納めに、この面をつけてお身がはりと、早速の分別……。月の暗きを幸ひに打物とつて庭におり立ち、左金吾頼家これにありと、呼はり呼はり走せ出づれば、むらがる敵は夜目遠目に、まことの上様ぞと心得て、うち洩さじと追つかくる。

夜叉王　さては上様お身替りと相成つて、この面にて敵をあざむき、こゝまで斬抜けてまゐつたか。（血に染みたる假面を取りてぢつと視る）

春彦　我々すらも侍衆と見あやまつた程なれば、敵のあざむかれたも無理ではあるまい。

かへで　とは云ふものゝ、淺ましいこのお姿……。姉様死んで下さりまするな。（取縋りて泣く）

かつら　いや、いや。死んでも憾みはない。賤が伏屋でいたづらに、百年千年生きたとて何とならう。たとひ半※一晌でも、將軍家のおそばに召出され、若狹の局といふ名をも給はるからは、これで出世の望もかなうた。死んでもわたしは本望ぢや。

（云ひかけて弱るを、春彦夫婦は介抱す。夜叉王は假面をみつめて物云はず。以前の修禪寺の僧、頭より袈裟をかぶりて逃げ來る。）

僧　大變ぢや、大變ぢや。かくまうて下され、隱まうてくだされ。（内に駈入りて、桂を見て又おどろく）やあ、こゝにも手負が……。おゝ、桂殿……。こなたもか。

かつら　して、上様は……。
僧　お悼(いた)はしや、御最期ぢや。
かつら　えゝ。（這ひ起きて屹(きっ)と視る）
僧　上様ばかりか、御家來衆も大方は斬死……。わし等も傍杖の怪我せぬうちと、命から／〃＼逃げて來たのぢや。
春彦　では、お身がはりの甲斐もなく……。
かへで　遂にやみ／＼御最期か。
（桂は失望してまた倒る。楓は取付きて叫ぶ。）
かへで　これ、姉さま。心を確に……。なう、父様。姉さまが死にまするぞ。
（今まで一心に假面をみつめたる夜叉王、はじめて見かへる。）
夜叉王　おゝ、姉は死ぬるか。姉もさだめて本望であらう。父もまた本望ぢや。
かへで　えゝ。
夜叉王　幾たび打ち直してもこの面(おもて)に、死相のあり／＼と見えたるは、われ拙きにあらず、鈍きにあらず。源氏の將軍頼家卿が斯く相成るべき御運とは、今といふ今、はじめて覺つた。神ならでは知ろしめされぬ人の運命、先づわが作にあらはれしは、自然の感應、自然の妙、技藝神(しん)に入るとはこの事よ。伊豆の夜叉王、われながら天晴れ天下一ぢやなう。（快げに笑ふ）

かつら　（おなじく笑ふ）わたしも天晴れお局様ぢや。死んでも思ひ置くことない。些（ちっ）とも早う上様のおあとを慕うて、冥土のおん供……。

夜叉王　やれ、娘。わかき女子が斷末魔の面、後の手本に寫しておきたい。苦痛を堪へてしばらく待て。春彦、筆と紙を……。

春彦　はっ。

（春彦は細工場に走り入りて、筆と紙などを持ち來る。夜叉王は筆を執る。）

夜叉王　娘、顔をみせい。

かつら　あい。

（桂は春彦夫婦に扶けられて這ひよる。夜叉王は筆を執りて、その顔を模寫せんとす。僧は口のうちにて念佛す。）

――幕――

（明治四十四年一月「文藝倶樂部」）

青空文庫情報

底本：「日本現代文學全集34　岡本綺堂・小山内薫・眞山青果集」講談社
　　1968（昭和43）年6月19日発行
初出：「文藝倶樂部」
　　1911（明治44）年1月
入力：土屋隆
校正：川山隆
2008年4月6日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

修禪寺物語

岡本綺堂

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/